

## 菱田海鷗と大垣詩壇（六）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/16478">http://hdl.handle.net/10291/16478</a>

## 菱田海鷗と大垣詩壇（六）

徳田 武

拙稿「菱田海鷗と大垣詩壇」は、本誌四四七（二〇〇九年三月）・四五〇（二〇一〇年一月）・四五五（二〇一〇年三月）・四六四（二〇一一年一月）・四七〇号（二〇一一年三月）に五回に亘って連載して来たが、主要詩人である菱田海鷗・小原鉄心・野村藤陰の死亡にまで至ってはず、未完のまま今日にまで至った。私は、海鷗ら主要詩人の死をもって、この長きに亘る原稿を終えることにしたい。そこで、本稿に彼ら三人の最後を見届ける所まで書き、これをもって完結させることにする。

### 八十五 木戸孝允と海鷗

九月二十日、明治天皇は東京へ向けて出発し、木戸孝允と菱田海鷗はこれに扈從した。二十五日、一行は桑名に到着した。これより前、海鷗は京都に居た時に、孝允に対して、「桑名駅におゐて小原鉄心に相会するの約」（『木戸孝允日記』一、明治元年九月廿五日）を承知させていた。そこで鉄心は、朝から席を設けて、ひたすら孝允が来るのを待つて

いた。孝允は繁忙で、「寸暇ヲ得ズ」という状態、ようやく八時頃、天皇の行在所から宿の「かぎ屋孫九郎」方に下り、すぐに鉄心を訪問しようとした。鉄心は鉄心で孝允の宿を尋ねようとし、兩人は途中で出会った。で、兩人は一緒にかねて宴席を設けていた楼に行った。楼の二階は三十二畳で、「天井中断し、其一片に書画を乱張す」と説明されているが、そこで『孝允日記』の記述は途切れている。たぶん、その後は例によって書画会を交えた酒宴となったのであろう。二十六日の『孝允日記』には「昨夜、快飲、將に曉に至らんとす」とある。

翌九月二十六日、孝允が早朝五時過ぎに出発、天皇の鳳輦のスピードを睨み合わせつつ佐屋（現、愛知県愛西市）へ向かい、睡眠不足から、うつらうつらしつつ佐屋に着岸、北風の激しき中を伏見屋甚助で昼食を取り、夜十時頃、宮駅に至り、長門屋に投宿すると、「小原鉄心、其他昨日之連、渡海、送り来、又開宴、長門屋のもの、挙家席に出、頻に旧を談ず」（『孝允日記』）、と言うから、鉄心たちは酔狂にも、ずっと孝允と海鷗たちの一行にくっついて来て、またもや酒宴なのである。だが一方では孝允は、九月二十二日に官軍の前に降伏した会津藩の状況を聞いて、「会津城下焼失の家中家宅中に、三軒、或は五軒に自刃の屍有<sup>レ</sup>之と云。又一家に二歳位の小兒を合せ、老少七人、刃に斃<sup>たお</sup>れしもの有と云。実に可<sup>レ</sup>憐之至也。彼等、元同數皇國の民にして、只大道を踏む処の相違より終にここに至る」と悲嘆にくれてもいたのである。

九月二十七日、午前中、天皇の熱田宮への行幸に供奉した孝允は、「昼後、鉄心・諸子と始て静に相談し、相酌む。大いに筆墨を弄し、七字（時）頃出立」と、やっと鉄心は、ここで別れて、その後は菅竹洲と荒川宗五郎が鳴海まで孝允を送った。

海鷗が「戊辰の秋、鳳輦に扈す、東海道中の作」（『遺稿』）を作ったのは、まさにこの頃の事と考えられる。

神武親征後

神武 親征の後

鸞輿始幸東

鸞輿 始めて東に幸すひゆま

青山迎聖蹕

青山 聖蹕を迎へ

紅葉繞行官

紅葉 行官を繞る

群后葵傾日

群后 葵の日に傾くごとく

三苗草偃風

三苗 草の風に偃すがごとしふ

陪隨皆俊又

陪隨 皆 俊又がい

儀衛尽熊

儀衛 尽く熊ひゅう

神武天皇がみずから遠征なされた後、

天皇の御輿が東国に行幸なされるのは、今度が初めてだ。

緑の山々が行列の先払いを迎え、

紅葉が旅する百官をとりまいている。

大勢の妃は、葵が太陽に向うように明治天皇を慕い、

奥羽の賊軍は、草が風になびくように官軍に伏した。

お伴の人々は、すべて俊秀であり、

護衛は、ことごとく熊ひくまのように勇猛な士である。

第六句の「草偃風」は、『論語』顔淵の「草、これに風を上ふれば、必ず偃す」を踏まえた。第七句には自注があって、「是の時、奥羽の賊徒罪に伏す」と言う。九月二十二日に会津藩が降伏したことが孝允たちに伝わったのは、鳳輦が天竜川を渡り、見付けに達した十月三日の事であり(『木戸孝允日記』一)、右詩の成立は、この頃である、と考えられる。第八句の「熊熊」は、『書経』康王之誥に勇猛の士を「熊熊之士」と言うのに基づく。

十一月十八日、既に東京に到着して暫くたった孝允は、菱田文蔵(海鷗)・林半七・作間正之助と小集している(『木戸孝允日記』一)。

翌々二十日、夜、孝允は、菱田文蔵・林半七・作間に「売茶」に招かれている(『日記』一)。

十二月一日、戊辰戦争で戦って来た会津藩の処置に頭を痛めている孝允は、東北諸藩の御処置調べ係りを、軍務においては大原重徳卿・香川敬三を、辨事においては田中五位・菱田文蔵が蒙るようにしている(『日記』一)。海鷗が明治三年に東北を視察し、福島県権知事に任ぜられる(百一)経緯は、この頃から始まっている。

十二月十九日、孝允は、菱田・日下部鳴鶴・作間・林半七などと約し、松本(料亭の名か)へ舟行した。斎藤も同伴し、小浜・小松・小勝・阿亀・阿哲などを携えている。みさ子・阿清もまた来た。諸子と大いに筆硯を弄し、十二時頃、舟を浮かべて帰った(『日記』一)。

十二月二十日、孝允は、明日、深川の伊勢屋弥兵衛の宅において大原重徳卿が会主となり、小集の催しがあるので、行こうと思ひ、作間と今宵より桜屋に到り一泊しようと思つていた。途中で菱田に会ったので、明日、同舟しようと思つた。

翌二十一日、十一時過ぎから作間・菱田二子と舟を発し、深川の伊勢屋別宅に到る。二時頃、到着。すでに秋月種樹・有馬の二侯、土方・嶋・香川・山中静逸・小野・日下部、そのほか十余人の徴士が列坐して、角力を見ている。角力は、

いずれも魁たる者が多いので、たいそう面白い。それが終ると、座中に筆硯を出し、おのおの意に任せて弄する。秋月侯が孝允に一詩を示す。香川は水戸人なので、孝允は、武田耕雲斎・藤田東湖二翁の旧誼を思いだし、感慨に堪えないものがあつた。大いに論じあい、先哲の志を今日に伸べ、地下に瞑目するよう思った。来月三日に再集することを約し、八時過ぎ、舟に乗って帰った（『日記』一）。

## 八十六 海鷗の帰省

明治二年の正月一日、木戸孝允は、皇居に参内し、明治天皇に恐悦を奏し、三等官以上の官吏と祝酒・重ね餅を頂戴した後、夕方には霞が関の邸宅で東久世ひがしくせ通禧とみひろ・大原重徳二卿、島氏などと会し、小酌した。菱田海鷗（三十四歳）・作間も来たり、それぞれ詩歌を揮毫する。女性も数人いて酌を助け、十二時頃に散会した（『木戸孝允日記』第一）。この会に就いて海鷗は、明治二十六年（五十八歳）、七、八月の交、病を押して大垣に久しぶりに帰省した際、岐阜の長源寺において、「長源山房にて松岡氏所蔵の霞関春宴合作幅を観て、感有りて作る 並びに引」（『海鷗遺稿』）を作ったが、その引に、「己巳元日の夜、参与木戸松菊公 東久世・山内・池田・大原・秋月の諸名公、及び山中静逸・作間某・日下部鳴鶴以下十余名を霞関邸宅に招同す。余も亦た与あずかる。此の幅は其の席上に作る所の諸公の筆なり。余 之に対すれば、諸公の音容 躍躍として目に在り、其の左右に坐するが如し、詩中故に云ふ」と言っており、ほかに秋月種樹たねたけや、画家の山中静逸、書家の日下部鳴鶴たちもいたことが知られる。

翌二日、五十三歳を迎えた鉄心は、何の用事か、京都に上った。毛芥が「己巳開春第二日、是水小原君の京に朝するを送る」（『毛芥遺稿』）を作っている。

丹心許国豈遲疑 丹心 国に許し 豈遲疑せんや

九折官途甘駢馳 九折の官途 駢馳に甘んず

夜雪披蓑踏函嶺 夜雪 蓑を披て 函嶺を踏み

春風躍馬入京師 春風に 馬を躍らせて 京師に入る

無雲無霧一輪月 雲無く 霧無し 一輪の月

不濁不清千頃陂 濁らず 清からず 千頃の陂

桃李滿門培養足 桃李 門に滿ち 培養足る

網羅更探路傍枝 網羅して 更に探る 路傍の枝

真心をもって国に命を投げ出すのに、どうしてためらおうか。

曲折の多い役人生活でも喜んで奔走する。

雪の降る夜には蓑をかぶって箱根を登り、

春風に馬を躍らせて京都に入る。

その心境は、雲も霧も無い一輪の明月のよう、

濁ってはいないが、潔癖過ぎもしない、広々した堤。

優秀な門人が輩出するのは、教導が十分だからで、

広く集めた上に、さらに通りすがりにも見出して行く。

鉄心の責務への誠実、広い度量と教導能力とを指摘し得た作品、と言えよう。また、末句により、人材登用に關する用件で上京した、と推測される。

一方、正月三日、海鷗は、東京に在って木戸孝允に従い、海浜の某侯の別荘（後述『木戸孝允日記』に拠れば深川の伊勢屋弥兵衛の別荘）の宴に赴いた。彼の五律「己巳正月三日、木戸松菊公に従って沙村の某侯の別墅に赴く」（『海鷗遺稿』）の引によれば、その日は、去年、伏見の戦いが勃発した日なので、もとの内閣の諸同僚が謀って、往時を語らんと期した。たまたま風雨に遇い、道がぬかったので、人々はいずれも舟を浮かべ、雨を突いて來った。酒になると、痛飲快談、戦時の豪快さが戻ったかのようだ。会する者は公卿侯伯から諸名士に至るまで、およそ六、七十人、座には力士や芸妓など二百人余りが詰めて、歌ったり舞ったりして酒興を助ける。まことに希有の盛会だと。その詩は次のようなものだ。

四来春舫集 四来 春舫集まる

潮急雨吹蒲 潮急に 雨 蒲がまを吹く

盛挙傾名士 盛挙 名士を傾け

豪遊動大都 豪遊 大都を動かす

弦歌灯万点 弦歌 灯万点

玉膾酒千壺 玉膾 酒千壺

何料去年苦 何ぞ料らん 去年の苦

翻成今日娛 翻かえって今日の娛みと成らんとは



正月、四方から舟が集まり、

潮の流れは急で、雨が蒲に吹きかかる。

盛んな宴に名士が動かされ、

景気の良い遊びは東京の評判となる。

三味線や歌が賑やかな中、無数の蠟燭が輝き、

新鮮な刺身や沢山のお鮎子が並べられる。

思ってもみただろうか、去年の戦争の苦しさが、

今日は逆転して楽しみの種となっていようとは。

去年の伏見戦争に参加した豪傑たちが、その回顧を酒の肴として楽しむ。これが平和の余徳でなくて何であろう。

『木戸孝允日記』の三日の記事を挙げて、海鷗の様子をより詳しく探るよすがとしよう。

三日。風雨。去年の今日、伏水に於いて干戈を開きしなり。一年にして国内、一先ず平定せり。依りて旧臘(十二月)より今日を約し、角力を深川伊勢屋弥兵衛の別荘に催せり。菱田・作間・斎藤・井上と十二字(時)上舟、別荘に至る。久我・東久世・西四辻・備前諸公、山中・香川其の外已に来て、在席、庭中に鮪店・天ぶら・でんがく等の飯店を設け、趣きを添へたり。また今日の角力等、皆当時の強健、実に一時の愉快観なり。暮れに至り雨稍稍やや晴るといへども、また今日の一遺憾なり。終りて各の大杯を傾け、角力等に投与す。六、七の妓も来て、先に在り。時に六、七年前、柳橋に於いて知る所の一妓、小照なるもの、余の名を呼び、始めて其の実を知り、往時の亡友を思ひ起こし、覚えす涕涙数行下る。十一字過ぎ、舟を浮かべて帰る。

すなわち、海鷗は、木戸と同じ舟で別荘に至ったのであった。また、「某侯別墅」と海鷗が記しているのは、会主の大原重徳しげよの別荘と思ひ込んでいるためであろう、ということが判明するのである。

この春、海鷗は、告を賜り、大垣に帰省した。『百官履歴』明治二年二月三日に、「勝手に発足致すべき旨、御沙汰候事、但し当地発途ヨリ出入三十日御暇ノ事」とあり、二月三日頃から一ヶ月間、帰国が許されたのであった。毛芥の七律「菱田徴士 告を賜り東京より帰る、賦して贈る」（『毛芥遺稿』）は、この折りの作であろう。その後半には、

十年湖海成材後 十年 湖海 材を成す後

累世詩書積善余 累世の詩書 善を積む余

好在文君掃眉侍 好在なり 文君 眉を掃ひて侍し

錦衣春暖照郷閭 錦衣 春暖かにして 郷閭を照らす

君は十年あまり異郷に在って人材となり、

二代に亘って詩や儒学を学び、善行を積んだことが報われた。

卓文君のような才媛の妻が化粧も美しく付き添い、

暖かい春に故郷に錦を飾って帰った。

と、海鷗が時めいている様を詠う。自注には、「今君は実に長脚の地に処ることし。固り鳴駕すべし矣。余が眼既に見る所有り。炬と曰はずと雖も、豆に非ず。私かに自から以て壯と為す」と言う。柱に題して故郷を去った司馬長脚（相

如)のように今や故郷に錦を飾った海鷗を、いち早く青年の頃に見込んでいた自分の眼力を、かがり火という程ではないが、豆同然ではない、と誇っているのである。とにかく、木戸孝允に気に入られて、権辨事兼学校取り調べに任じられていたこの頃が海鷗の絶頂の時代と言えよう。

この直後、鉄心は、海鷗とともに養老山に遊び、花を千歳楼に見た(「己巳の春、菱海鷗と共に養老山に遊び、花を千歳楼に観る、感有りて此れを賦す」〔『遺稿』八)。その詩は、次のようなものである。

漫遊来訪老山泉 漫遊 来訪す 老山泉

溪樹欣欣欲及辰 溪樹 欣欣として 辰に及ばんと欲す

花正三分觀更好 花は正に 三分 觀れば更に好し

皇朝明治二年春 皇朝 明治 二年の春

ぶらぶらと養老山の泉まで遊びにやって来た。

溪の樹は生き生きとして成長の時を迎えようとしている。

桜花はちょうど三分咲きだが、眺めは一段と良くなった。

今しも天皇親政の明治二年の春だ。

この詩には大沼枕山の「古人 詩中に歳月を紀す者は、間適の作と雖も、皆時事に関するもの有り。此の首も亦た然り」という頭評が付されている。一見、時事を詠じているとは思えないが、結句で歳月を記しているので、時の政治を

反映して、欣欣たる樹木は新しい御世をことほぐ象徴であり、三分咲きの花も新政をなぞらえたものだ、と読めるのである。かく言う基底には海鷗の出世を喜ぶ心情があるろう。

八十七 李遂川との再会

その後、鉄心は、東京に旅立つ。大夢を強引に連れて行ったらしいことは、毛芥に「是水老大夫 蘇髻卿を拉して東京に赴く、賦して送る」（『毛芥遺稿』）があることによって推察される。

是水大夫大棟梁 是水大夫は 大棟梁

当路雄藩三十霜 路に雄藩に当たること 三十霜

控御有術多益辨 控御 術有り 多ければ益々辨す

驅使俊髦如牧羊 俊髦ほうを驅使すること 羊を牧するが如し

大夢先生奇男児 大夢 先生は 奇男児

昨隠浮屠今高陽 昨は浮屠に隠れ 今は高陽

才氣奔逸脱羈勒 才氣 奔逸して 羈勒くわを脱し

使酒撼髻説勤王 酒を使ひ 髻こみかを撼し 勤王を説く

有為人逢有為日 有為の人は 有為の日に逢ひ

手攀芙蓉足函谷 手もて芙蓉よを攀じ 足もて函谷

際会顧眄必鷹揚 際会 顧眄こめん 必ず鷹のごと揚がり

名公鉅匠互商量 名公 鉅匠 互いに商量す

嗚呼王良造父駕駿馬 嗚呼 王良 造父は 駿馬に駕し

不怕前程任重而道長 怕おそれず 前程 任重くして道長きを

家老是水殿は、藩の大棟梁で、

大藩の指導者たること三十年。

制御する術を知っており、案件が多いほど腕を発揮し、

俊才を動かすことは、羊を飼うように自在だ。

さて、大夢先生は、痛快な男子で、

この間までは僧侶の姿だったが、今は高陽の酒徒。

才気はあふれんばかりで、拘束されること無く、

酒を飲んでほむひげ髯を揺るがし、勤王について論ずる。

仕事のできる人が仕事すべき時期に逢い、

富士山を這い登り、箱根を踏破する。

江戸で名ある人や大物と出会い、見交わせば、きっと鷹が拳がるように才能を示し、

お互いに技量を競い合うことだろう。

ああ、王良や造父（ともに周の優れた御者。『荀子』王霸）が駿馬を走らすように、

前途の任務が重く道のりが遙かであることを恐れなさるな。

高陽は、河南省杞県。その酒徒とは、酈れい食いき其きが漢の高祖に謁見する時、自分を指して言った句である（史記、酈生・陸賈伝）。鉄心の人材駆使術と勤王僧大夢の遊説ふりとを言挙げした詩である。

それから鉄心たちは、名古屋で丹羽賢・田中某と歓飲し、東海道に道を取って東上したことは、「名府に過ぎり丹羽・田中二徴士と共に城南の杏花村荘に飲す」「東海道中に友人と別る」（『遺稿』八）という二絶が並んでいることによつて知られる。前者の転結句には、

真成風日如王化 真成まことに 風日 王化の如し

暗柳明花暖靄中 暗柳 明花 暖靄の中

本当に日和や景色は天皇の徳化が行き渡っているようであり、  
茂った柳や美しく咲いた花が暖かい靄もやの内にかすんでいる。

とあり、これまた天皇の新政をことほいでいるのである。

その後、横浜に達した鉄心たちは、旧知の清客李遂川と三年ぶりに会い（慶応二年四月五日に鉄心たちが李遂川ら清客と筆談を交わしたことは、六十四参照）、会芳亭で歓飲した。「己巳の春、清客李遂川と共に横浜の会芳亭に飲す、酒間賦して贈る」（『遺稿』八）に言う。

三年重上会芳亭 三年 重ねて上る 会芳亭

笑对吟樽喜眼青 笑って吟樽に対し 眼青を喜ぶ

一別風塵無限事 一別 風塵 無限の事

看吾双鬢更星星 看よ吾が 双鬢 更に星星たるを

三年ぶりに再び会芳亭に上がり、

酒を飲み歓談して詩を作り、暖かい歓迎を喜ぶ。

先に別れてより世間は限りなく紛糾して、

私の両鬢には更に白いものが増えたのを見て下さい。

維新の激動を経て、久しぶりに再会した喜びが詠じられた作である。

三月十四日、東京に到着した鉄心は、その足で東京に来ていた雪爪を芝青松寺内の清岸院に尋ね（『鴻雪爪翁』五十  
五頁）、十八日にはともに増上寺の方丈の招きに赴いている。四月一日には、海鷗とともに雪爪を訪れている。この間  
には明治天皇の奠都で賑わう東京で用事を済ませた筈である。そして四月十日、東京を起つことになるが、それに際し  
て「四月十日、将に東京を發せんとし、偶ま此の作有り」（『遺稿』八）を詠じた。

羣牧争朝新帝京 羣牧 争ひ朝す 新帝京

大城気色瑞雲生 大城の気色 瑞雲生ず

病夫不是掩留地 病夫 是れ掩留の地ならず

聴取鵑声曉上程 鵑声を聴取して 曉に程に上る

天皇が移られたばかりの東京では大勢の官僚が先を争って朝廷に出仕する。

大きな皇居は格別な雰囲気で、めでたい雲が取り巻いている。

病をかかえた自分のような者が留まっているべき土地ではない。

ほととぎすの声を確認して、明け方に旅立つ。

薩長土肥を始めとする各地から来たった官吏たちが集まり、この時とばかり出世を目指し、競う雰囲気、病んだ鉄心は、付いていけないものを感じたようである。ほととぎすに象徴される自然の美へ回帰すべく、また大垣に帰るのである。

## 八十八 斎藤誠軒との交流

大垣に戻った鉄心は、五月二十七日、斎藤誠軒（拙堂の長男。伊勢藩督学。四十四歳）の招待を受けて、伊勢の津に赴き、野村藤陰・土井整牙・戸波某・松岡環翠・野田竹溪・神田耕雲・池田雲樵・今井竹僊・高木文仙・早崎崑川・上西快堂および京都の画家日野根対山・谷口藹山・清雅堂・黄仲祥などと茶磨山ちやうすの棲碧山房に飲んだ。藤陰の「五月念七日、斎藤誠軒君 鉄心大夫及び余らを其の棲碧山房に招飲す。会する者は土井整牙……等なり」（『藤陰遺稿』一）に言



う。

茶磨山下高人宅 茶磨山下 高人の宅

屈指曾遊幾歲更 指を屈すれば 曾遊 幾歲更あらたむ

重渡松坡穿竹塢 重ねて松坡を渡り 竹塢を穿つ

依然橋影映灘声 依然たり 橋影 灘に映る声

詩筵不是新知識 詩筵 是れ新知識ならず

邱壑唯虧旧主盟 邱壑 唯だ虧く 旧主盟

俯仰豈無今昔感 俯仰 豈 今昔の感無からんや

滿眸山色暗愁生 滿眸の山色 暗愁生ず

茶磨山の麓に高雅な誠軒先生の家がある。

指折り数えれば、かつて遊んでから、どれほどたったやら。

再び松の坂を上り、竹の土手を通れば、

相変わらず橋の影が音をたてて流れる灘なだに映っている。

詩を作る席にいるのは顔なじみの人々で、

丘や谷のかつての主人拙堂先生の姿だけが見えぬ。

回顧すると、どうして昔と今の違いが感じられぬだろうか

目の前の青山を見渡しても、そぞろに愁いが湧いて来る。

第三・四句は、対句が崩れているが、自注があり、「拙堂先生の山房詩に云ふ、竹塢松坡俗逕無く、灘声橋影塵愁を洗ふ」と言う。藤陰が前度に出堂のもとを訪れたのは、鉄心が訪れた元治元年（一八六四）九月二日（五十二参照）のことであつたらう。それから五年が経過したのだが、その間には拙堂の死（慶応元年七月十五日、六十九歳）があるので、第六句以下の述懐が生ずるのである。

翌二十八日、藩主藤堂高潔たかきよが鉄心・藤陰たちに偕楽園で宴を賜った。藤隠に七律「其の翌日、藤堂公 宴を其の偕楽園に賜ふ、此れを賦して喜びを紀す」（『藤陰遺稿』一）がある。詩は略す。

こうして津で歓待された鉄心と藤陰は、帰途、四日市にさしかかり、印田某を訪れた。印田は網元であろうか、鉄心と藤陰を海浜に招き、漁獵と魚の調理とを見せた。藤陰の「帰途に四日市の印田某を訪ふ。某 大夫及び余を其の海浜に招きて、打魚を観す。頗る壯観なり。此れを賦して以て主人に謝す」（『藤陰遺稿』一）に言う。

腐儒何幸飽香腴 腐儒 何の幸いか 香腴に飽く

雪片錦花推玉盃 雪片 錦花 玉盃に推したか

何音脯池肉林盛 何ぞ音たに 脯池 肉林の盛んなるのみならんや

把他碧海作庖厨 他かの碧海を把りて 庖厨なと作す

屁っぴり儒者の私だが、どういふ幸いか御馳走には不足しない。

雪片のように白く錦花のように鮮やかな刺身が綺麗な鉢にうず高い。

どうしてただ魚肉が沢山に盛られているだけであろうか。

青い海をも台所としているのだ。

起句は、これより前、藤堂高潔から「仙釀」「膾鮮」を振る舞われたことをも含めて言っていよう。結句は、措辞といい、比喩といい、以下にも藤陰らしく巧緻である。

七月十四日、鉄心は、大垣藩大参事に任ぜられた(『百官履歴』)。『藤陰遺稿』一には、右詩に続いて、「小原徴士に贈る」が置かれている。たぶん、この時に祝意を込めて詠じた作であろう、鉄心の功績を良く道破したものである。

東出又西没 東に出で 又た西に歿し

変化幾千回 変化 幾千回

誰識冥冥裡 誰か識らん 冥冥の裡

維持国勢来 国勢を維持し来るを

東西に出没し、

変幻自在に対応した。

いったい誰が理解できようか、何時の間によら

大垣藩の命運を維持させたことを。

一首は、鉄心が隠忍自重し、幕末の情勢を見極め、土壇場のところで大垣藩を佐幕から勤王に切り替え、史上の勝者とした大功を、人竜に見立てて表現したものである。鉄心の一生を見事に要約したもの、と言って良い。

八十九 木戸孝允・伊藤博文との歓会

大垣で悠々自適していた鉄心は、平穏な生活に飽きたのであろうか、別天地を求めて、菰野温泉に遊ぶ。その際、旅程を大垣から木曾川を下り、桑名の九華港くわんに到り、そのあたりから上陸して菰野へ到る、というものに取ったのである。『遺稿』八には「九華港に泊す」「菰野温泉に遊ぶ」という詩が並んでいる。その内、前者は次のようなものである。

帰家高臥適雖多 家に帰り 高臥すれば 適多しと雖も

別有幽懷遂奈何 別に幽懷有り 遂に奈何せん

又向南州海浜去 又た南州の海浜に向かつて去り

扁舟泛月聽漁歌 扁舟 月に泛べて 漁歌を聴く

家に帰って悠々と寝そべっておれば快適ではあるが、

新たに旅情が起こって来て、どうして抑えられようか。

そこでまた、南方の海辺に赴き、

小舟を月の下に浮かべて、いさり歌を聴くことだ。

家に在る閑適とは別種の安らぎ、即ち旅情を求めていることが見て取れるのである。

「孤野温泉に遊ぶ」は、次のような作である。

与世相忘意欲仙 世と相忘れ 意 仙ならんと欲す

眼看白石耳清泉 眼には白石を看 耳には清泉

人間快事有今日 人間じんかんの快事 今日有り

都下風塵三十年 都下の風塵 三十年

世間の事は忘れて、仙人になりたいと思う。

眼には白く輝く石を見、耳には清らかな泉の音を聞く。

今日こそこの世の快樂を占めることができた。

これまで都会で三十年間も俗にまみれた生活をして来たのだ。

この詩は、世俗に忙殺されるからこそ閑適を求めるといふ主題のものであり、「小原鉄心の青年時代」に述べたように、雅俗二元の折衷止揚という鉄心詩の構造が典型的に見られるものである。

九月、鉄心は、東京に向けて旅立った。今年は三度目である。「晩秋 大垣を発し三たび東京に赴く。路次偶ま作る」

『遺稿』八)に言う。

兵後年荒魂正銷 兵後 年荒れ 魂正に銷きゆ

函山五度陟嶢嶂 函山 五度 嶢嶂きやうしやうを陟のぼる

奏朝急欲緩民苦 朝に奏して 急に民の苦を緩めんと欲し

依旧行程更覺遙 旧に依る 行程 更に遙かなるを覺ゆ

戦さの後は凶作になり、意気は消沈してしまふ。

箱根のけわしい山を、今年は五回登ることになる。

朝廷に奏上して、いそいで民衆の苦しみを緩めようと思うと、

道のりは変わっていないのに、前よりも遠いと感じる。

明治二年の秋は凶作であった。新政だと浮かれてはられない。難所の箱根を年老いてたびたび登るのは大儀であるが、困窮している民状を訴えるべく、鉄心は山路を急いだのである。

十月十五日、既に東京に在った鉄心は、木戸孝允・伊藤博文、および長州藩士・会津藩士数名とともに舟を海口に浮かべて月を賞した（十月望、木戸三位・伊藤五位及び長藩士・会津藩士数名と共に舟を海口に泛べ月を賞す）『遺稿』八）。『百官履歴』を按ずるに、伊藤博文は、明治元年五月六日に従五位下に叙せられており、伊藤五位とは博文のことであると確認できる。戊辰戦争で敵対した長州藩士と会津藩士が同じ舟に乗り合わせた訳で、まさに呉越同舟であるが、木戸や伊藤の狙いも、まさしく両藩士の融和に在ったのではなからうか。鉄心の詩は、次のようなものである。

与此人豪縦此歎 此の人豪と 此の歎を縦まにす

恰逢十月月団円 恰も逢ふ 十月 月団円なるに

時雖乱後已明世 時は乱後と雖も 已に明世

豈可髻蘇一例看 豈 髻蘇と 一例に看るべけんや

これらの傑物たちとこのように歎染をほしのままにする。

ちょうど十月の満月の日だ。

時は戊辰の乱の後だが、もはや平和になっており、

どうして髻を生やした蘇軾の遊びと同様であろうか。

元宝五年(一〇八二)十月十五日に黄泥坂に遊んだ蘇軾の「後赤壁の賦」は、少ない酒で楽しみを催すことを言うが、鉄心たちの遊びは、小野湖山が頭評で、「是の月、君 此の詩を大書して寄せらる。自註に云ふ『此の夜、興趣頗る逸す。余と三位と遂に伊藤氏の家に酔倒す云々』と。其の風流豪懷想ふべし」というように、豪快に大酒したようだ。大沼枕山も、「誰か謂ふや、謹慎の辞工みなり難し」と、舟の人豪たちが歎染を尽したことを感じ取っている。

ちなみに、木戸孝允の日記では、

今夕、小原鉄心と約有り。浮舟、築地に来る。与に伊藤を訪ひ、共に舟に依り、海水浮べ、月を見る。尤も良夜也。挙げてホテルに至り、食事を認む。同席の客、会津人兩名、岸和田・佐藤某・青浦・杉山・福井等也。角力鬼面山之に陪す。各の書画を認む。小原の僕、余に書を求む。此のもの角力なり。依りて戯れに三十一字を揮ふ。

世の中は相撲の外の相撲かな勝負の外に勝ち負けはあり。

十字頃相散ず。小原と伊藤に至り、共に相泊る。

とある。鉄心の僕で相撲取りとは、荒川宗五郎であろう。この記事も、やはり鉄心と木戸が共に伊藤のもとに宿泊したことを言う。

十一月二十一日にも鉄心は、木戸孝允のもとを訪れているが、翌二十二日、孝允は、

昨日、小原鉄心託する所の書を読む。

と、鉄心のために何か書を書いている。

## 九十 観梅の復活

明治三年（鉄心五十四歳）の正月二十日、鉄心と藤陰（四十四歳）たちは、例により、梅を牧野に探った。藤陰に、「庚午正月念日、鉄心大夫及び諸彦に陪して梅を牧野に探る、東坡の女王城に遊ぶ詩の句を用ひて韻と為す」（『藤陰遺稿』一）がある。その引に「今を距ること十年前の辛酉正月念日、梅を探り坡仙の句を用ひて韻と為し、小詩七首を作る。此れより年々例と為す。其の後国家多事、吟遊を阻まるること年有り。今茲復た旧典を継ぐと云ふ」と言う。足かけ十年前の文久元年の正月二十日に鉄心や海鷗・毛芥・宇野南邨たちが牧野・荒尾の諸村に梅を探ったことは、二十七「蘇軾出遊」に記した。その際、藤陰は参加していなかったのである、今年、平和の到来とともに久しぶりに旧例を復したので、これに参加し、五絶七首を詠じたのである。

二月二十二日にも、藤陰は、鉄心の無何有荘で梅を見て、「二月念二日、無何有荘に梅花を看、大参事小原君の韵に



次す」『遺稿』一)を詠じている。

措置百端機務了 措置 百端 機務了す

風流引客飲林家 風流 客を引きて 林家に飲む

生徒半百班荆坐 生徒 半百 荆を班しきて坐す

錦粲玉聯鬪筆花 錦は粲として 玉は聯なり 筆花を鬪はす

小原殿は万事の処置宜しく、要務を終えると、

風流にも客を招いて、梅林の家で飲まれる。

弟子たちが五十人ほど筵を敷いて坐り、

錦が輝き玉が連なるような美しい詩を競って作る。

起承二句は、鉄心が事務処理と風流文雅の両面において卓越していることを指摘したものであり、転句は、その日、来集した者が多かったことを伝えている。第二首は、起承の二句だけ紹介するが、

飲量兼併度量大 飲量は 兼併し 度量は大なり

愧吾小戸不成家 愧ず吾 小戸 家を成さざるを

鉄心殿の酒量は数人分もあり、度量は大きい。  
私はあまり飲めなくて、一家を成せないのが恥ずかしい。

と、鉄心の酒量も度量も大きいことを指摘している。

### 九十一 海鷗の東北・北海道行

同じ三年の二月七日、海鷗（三十五歳）は大史に任じられ、従六位に叙せられた（『百官履歴』）。継いで十九日には按察権判官に任じられ、奥羽に赴く。『海鷗遺稿』には「乱後、陸羽道中三首」と「庚午二月、按察権判官に任ぜられ、白石府に赴く、困りて一章を賦す」が並べ配せられ、この月に白石に向かったことが知られる。

朝奉廷恩重 朝に廷恩の重きを奉じ

夕巡三陸疆 夕べに三陸の疆まかいを巡る

民風雖鄙野 民風 鄙野なりと雖も

人質本貞良 人質じんしつ 本 貞良

螳斧曾当轍 螳斧 曾て轍に当るも

葵心始向陽 葵心 始めて陽に向かふ

予来官道側 予かねて 官道の側らに来たり

迎謁捧壺漿 迎謁して 壺漿を捧ぐ

今日、朝廷から官を授けられたと思うと、

翌日には三陸海岸あたりを巡視することとなった。

民衆の風俗は粗野ではあるが、

人柄は元来実直だ。

かつては螻蛄が斧をかざして車に立ち向かうように、官軍にはかない抵抗をしたが、  
今や向日葵が太陽に向かうように、政府になびいている。

前もって官道の側らに控えて、

私を拜して礼物を捧げる。

このように海鷗は、戊辰戦争に勝利した官軍側として、意気揚々と東北に入るのであるが、後日、青森県の権令になると県民から手痛い抵抗を受けることになるのである。第二首に言う。

松朽留丸見 松朽ちて 留丸見え

沙埋折戟新 沙埋めて 折戟新たなり

関河余悌涙 関河 悌涙を余し

天地尚風塵 天地 尚ほ風塵

村落煙花少 村落 煙花少なく

郵亭羽檄頻 郵亭 羽檄頻りなり

皇恩何日遍 皇恩 何れの日か遍く

鼓腹更回春 鼓腹して 更に春を回らさん

松は朽ちて、残っている弾丸が見え、

沙には折れたばかりの戟ほこが埋もれている。

関所や河をみれば、涙がぼろぼろこぼれ、

各地にはまだ一揆や戦が起きている。

村里には春景色が少なく、

宿駅には戦さの報告が頻繁に伝えられる。

いったい何時の日に皇恩が遍く行き渡り、

民が平和を謳歌する春が廻って来るのだろうか。

東北には戊辰戦争の痕はなお消えやらず、各地には一揆や反乱が群発している。明治初年は、まだ世相不安である。右詩は、そのような状況を愁いたものである。

続く「庚午二月、按察権判官に任せられ白石府に赴く、因りて一章を賦す 三十五歳の作」〔『海鷗遺稿』〕は、悲憤慷慨の情をもっと激しくぶちまける。

朝奉廷恩重

朝に廷恩の重きを奉じ

暮巡北部辺

暮に北部の辺りを巡る

曠野三陸漠

曠野 三陸漠たり

雪峯両羽寒

雪峯 両羽寒し

壑深花讓後

壑深くして 花は後に譲り

水合流争先

水合ひて 流れは先を争ふ

生靈皆菜色

生靈 皆菜色

村落多荒阡

村落 荒阡多し

按撫宜得道

按撫 宜しく道を得べし

施為要称權

施為 權かなに称なふを要す

豈傲腐儒濶

豈 腐儒の濶なるに傲はんや

切憎俗吏奸

切に俗吏の奸なるを憎む

憂思口忘食

憂思 口に食を忘れ

慨忼心誓天

慨忼 心に天に誓ふ

開吻言激烈

吻を開けば 言 激烈

迸胸淚連綿

胸はしに迸り 淚 連綿たり

頼依聖運厚

頼さいに聖運の厚きに依り

応有陰陽勻

応に陰陽の勻ととのふこと有るべし

父老伝佳話 父老 佳話を伝ふ

今秋定有年 今秋 定めて年有らんと  
みのり

朝に朝廷の重い恩命を受けると、

暮れには東北の辺境を巡っている。

三陸には広大な野原が広がり、

羽前・羽後の嶺には雪が積もって寒い。

谷は深く、花は次々と咲き変わり、

幾つもの水流が合わさり、先を争って流れる。

人々は、すべて顔色が悪く、

村々には荒れた田畑が多い。

民衆をなつけるには、正しい政道をもってすべきだ。

その実施にはバランスを取らねばならぬ。

どうして腐れ儒者の迂闊なやり方に倣おうや。

俗な役人のずるさは最も憎むものだ。

憂い思つては口に食を入れることを忘れ、

痛み歎いては心の中で天に誓う。

くちびるを開くと言葉は激烈になるが、

胸には涙が止めどなくほとばしる。

幸いに天皇の厚い御恩のお蔭で、

きっと天候が整うことであろう。

土地の老人たちは、よい消息を伝えている、

今年の秋は、きっと豊作であろうと。

東北地方は戦争と凶作のために疲弊している。海鷗は、こうした様に心を痛め、必ずや民衆を慰撫する政治を敷こうと決意する。その意気や良し。しかし、慷慨が激烈すぎるのが気に掛かるのである。まだ若い海鷗は、己の理想を実現するのに性急なあまり、住民と摩擦を起こす恐れがあるのではないか。詩には、そうした懸念が感じ取れるのである。

この後、海鷗は、さらに北上して、北海道に到ったようだ。『海鷗遺稿』では次に「北海道に赴く舟中の作」が置かれる。

茫茫天水四無涯 茫茫たる天水 四もに涯無し

独立舵楼生感慨 独り舵楼に立てば 感慨生ず

直向北辰星下行 直ちに北辰星下に向かって行く

誰哉今世閻竜兒 誰ぞや 今世の 閻竜兒

天と海水とが四方に果てし無く広がっている。

ただ独り後部のやぐらに立っていると、様々な感慨が生じる。

まっすぐに北極星に向かって行く。

誰が当代のコロンブスと言えようか、私なのだ。

右詩は、『遺稿』においては、第二句と第三句の順序が逆になっているのだが、それでは脚韻の規則にはずれるので、これを改めた。結句の閩電は、中国音ではクローンとなり、コロンブスを表わしている、と解せる。津軽海峡を北進するうちに、海鷗の気持ちは昂ぶり、世界の海を股にかけてコロンブスのような積りになったのである。

こうして東北・北海道を視察した海鷗は、八月には民部権大丞を兼任し、九月には福島県権知事に任じられた（『菱田海鷗略伝』『海鷗遺稿』）。

同年の冬、大垣藩の知事（旧藩主）戸田氏共（十七歳）が米国に留学することになり、鉄心は、「庚午の冬、我が知藩事公 将に海外に遊ばんとす、高韻に次し恭しく二十八字を書す」（『遺稿』八）を物している。

不遊海外奈人才 海外に遊ばずんば 人才を奈んせん  
 公有此行真壮哉 公に此の行有り 真に壮なるかな  
 重拜温顔定何日 重ねて温顔を拜するは 定めて何れの日ぞ  
 并将悲喜満胸来 悲喜を并せ将て 胸に満たし来たる

西洋に遊学しなければ、人材はできはしないだろう。



我が君が遊学なされるのは、本当に意気盛んなことだ。

また麗しいお顔にお目にかかれるのは、いつの日のことか。

悲喜こもごもの感が胸に一杯になる。

西洋嫌いの鉄心も、今やその新知識を学ばなければ、やって行けないことは、認めざるを得ない。

## 九十二 鵝笑社

明治四年（鉄心五十五歳）春、鉄心は朝廷の召しに応じて東京に上った。たまたま柳橋の酒樓で鷺津毅堂（四十七歳。司法省出仕）と出会った。鉄心は、髪が薄くなり、齒が抜け、酒量も幾分か落ちてゐる。毅堂は心にひそかに怪しんだ。年が僅かに五十を過ぎたばかりなのに、どうして衰えがこんなに早いのかと（「辛未の春、鉄心 召しに応じて京に入る。余 柳橋の酒樓に邂逅す。鬢髮蕭疎、齒牙脱落、飲酒 前日に比すれば幾分かを減ず。余心に竊かに其の齡僅かに五十を過ぎて、何ぞ早く衰ふること此の如きやと怪しむ」〔鉄心遺稿序〕。鉄心の上京は、正月に本保<sup>ほんほ</sup>県権知事に任じられ、正六位に叙せられた〔鉄心小原君墓碑銘〕『藤陰遺稿』三）事と関係していよう。本保県は、現在の福井県越前市本保町のあたりに在った。鉄心の任期は、一月十四日から三月二日までで、県が同年十一月に廃止されることと関連しているのであるが、いまだ任に赴かずして免ぜられ、大垣藩庁出仕に補せられた。

同じくこの春、鳥居奎陰と、鉄心の養子迪（雁陽）が欧州に遊ぶことになり、鉄心は、「辛未の春、鳥居奎陰及び児迪、將に海外に航し五洲を跋涉せんとす、一日相会し、痛飲して時事を論じ、別に臨んで賦して示す」〔遺稿』八）を

詠ずることとなった。

乾坤誰是揆天才 乾坤 誰か是 揆天の才なるぞ

尋到五洲何快哉 尋ねて五洲に到る 何ぞ快なるや

字字知音共無用 字を学び 音を知るは 共に無用

看他立国有由来 他の国を立つるに由来有るを看よ

この天地の内では何者が天に広がるほどの才能なのか、

そうなるために五大州を尋ね廻るのは、何と快適なことか。

西洋の字を学んだり発音を知ったりするのは、すべて無用だ。

その国家を立てている根本の処を、よく見て来なさい。

大沼枕山が頭評で、「字を学び音を知るを必とせず、但だ其の本を立つるを看よと。真に世教に関わるの語有り」と指摘するように、鉄心にとっては、伝達手段としての語学よりも、立国の根本たる歴史的基盤や制度・精神を観察することの方が重要なのである。

九月十四日、鷗笑社（大垣の詩社）の同人が集まり、一日百詩を試みた。鉄心の「九月望前の一、鷗笑社中相集まり、一日に百首を作る、余も亦た其の座に在り、太白連酌し、酔余 此の詩を書して去る」（『遺稿』八）に拠れば、彼

は、百詩を作ることには関心を示さず、もっぱら大杯をあおり、次の一詩のみを作って、座から去ったようである。

黙思沈吟如坐禅 黙思 沈吟 坐禅の如し

後先此際互争鞭 後先 此の際 互に鞭を争ふ

不知百鍊千磨句 知らず 百鍊 千磨の句

能到真情有幾篇 能く真情に到るは 幾篇か有る

皆が黙って考え、苦吟して、坐禅を組んでいるようだ。

今しも出来上がりの早さを我先にと競っている。

そんなに沢山の句をいじくり回している、

真実の感情を言い得たものは、どれほど有るんだ。

一日百詩は、作詩の速度を競うものであるから、詩情を深化させ、語句をゆっくり練っている暇は無い。上すべりした粗製乱造の作品が多くなるのは避けられない。真情を平明適確に詠ずることを旨とする鉄心からすると、そうした言語遊戯は、全くの閑文字で、意味がないものである。そこで、そんな事をするよりは酒でも飲んだ方が益した、という意を示すために独り立て続けに飲み、一詩だけ作って立ち去った。いかにも鉄心らしい皮肉と寓意を込めた態度である。

なお鶏笑社というのは、鉄心が興した詩社で、その名の由来は『莊子』内篇「逍遙遊」、鯤や鵬の大志を理解できないで笑う斥鴳みそぎいから取ったものである。鉄心の死後は野村藤陰を社主とし、戸田葆逸ほくいつ（葆堂。画家。大垣藩士戸田義尚

の長子）・杉山千和・溪毛芥・江馬金粟などを同人として、明治十四年九月からは『鷓笑新誌』を刊行した。毎号巻頭を先師鉄心の詩文が飾っていた、という。

十一月、先に福島県権知事を勤めていた海鷗は、今度は青森県権令に任じられた（『菱田海鷗略伝』）。六年八月に本官を免じられたが、その間、海鷗は、戊辰戦争以来、明治政府に反感を抱いている県民の抵抗に遭い、手こずる事が多かったようである。

十二月二十七日、鉄心は戸田葆堂を訪れ、酒を酌み交わした。「臘月念七、葆堂子を訪ふ、酒間に賦して贈る」（『遺稿』八）がある。

身已欲脱世 身は已に 世を脱せんと欲す

心未遽遽然 心は未だ 遽遽然たらず

約子窮陰夕 子に約す 窮陰の夕に

携酒叩老禅 酒を携へて 老禅を叩かんと

身体は世俗から抜け出そうと望んでいるのだが、

心は、まだその気になっていない。

君と約束しよう、大晦日の夕方に、

酒を持参して迅雷禅師のもとを訪れることを。

遽々然は、『莊子』齊物論に見え、急ぐ様。結句の「老禪」を迅雷禪師と訳したのは、すぐ次に五絶「迅雷師に寄す」が配され、十二月三十日には、後述するように、桃原山に迅雷禪師を訪れているからである。その「迅雷師に寄す」では、寺門は殿堂が壮大だが、葷酒はもとより禁じている、だから吾が慮に禪師が訪れるならば、酔って深い玄味（禪の深遠な境地）を話すことができようと、迅雷の来訪を求めている。

十二月二十九日、詩友たちが鉄心を無何有荘に訪うて、酒を飲みながら語り合い、夜を徹し、明け方に帰った。その様は、「小除夕、諸韵友 予が無何有荘を訪ひ、玄話醉談、遂に天明に到りて散ず」（『遺稿』八）に次のように詠じられる。

一任人間百是非 一任す 人間の 百是非に  
 十年世運算無違 十年 世運 算するに違ふ無し  
 窮陰此夕会仙客 窮陰 此の夕べ 仙客を会す  
 未到天明不許帰 未だ天明に到らざれば 帰るを許さず

世の中の良い事も悪い事もあるがままにしておく。

十年間、世の中の動きを予測してきて違わなかったから。

晦日のこの夕べに詩友たちを集めた。

まだ夜明けになっていないから、帰さないぞ。

起承の二句には、大垣藩を巧みに佐幕から勤王に転換させた鉄心の自信が窺えるのであるが、それだけに今夕は俗事を一切放擲して風流談にのめり込もう、と言うのである。なお、この会に野村藤陰も参加したことは、その「辛未小除夜、鉄心君 諸彦を無何有荘に招かる、余も亦た与あずかる焉、君 詩有り、因りて其の韵に次す」（『藤陰遺稿』二）によって知られる。その結句に、「客を留めて通宵放ち帰さず」と言うから、藤陰も徹夜したのである。同じく毛芥も在ったことは、その「辛未除夜、無何有荘に会す、荘主 詩有り、諸客其の韻に和す、余も亦た響ひびに倣ふ」（『毛芥遺稿』）に知られる。その頸聯に、

中興偉烈豈夫非

中興の偉烈 豈夫れ非ならんや

凡百廟算無一違

凡百の廟算 一も違ふ無し

大垣藩を中興した偉業は、どうして非と言えようか。

もろもろの政治的計画は、一つとして違ふことが無い。

と言うのは、鉄心の起承二句を受けて、やはり彼が大垣藩を勤王に転換させた功績を讃えているのである。

翌三十日、鉄心は、肉を携えて桃原山に到り、迅雷禪師とともに夜を徹し、新年を迎えた（「大除夕、歳を桃原山に守り、雷禪師の韻に次す」（『遺稿』八）。その題注に、「予 此の夕、肉を携えて至る、故に句中に之に及ぶ」という。藤陰は、「除夜、鉄心君 諸子と共に歳を桃原山に守る、余 故有りて赴くこと能はず、雷師の韵に次して以て謝す」（『遺稿』二）というように参加できなかったが、しかし諸人がいたというのだから、二十七日に同行を約束していた葎

堂も、その仲間に居たであろうか。

守歳禪房詩酒忙 歳を禪房に守り 詩酒に忙し

桃原日月不知長 桃原の日月 長きを知らず

醉仙自許元公肉 醉仙 自から許す 元公の肉

有此雷師容此狂 此の雷師有りて 此の狂を容る

禪寺で年越しをして、作詩だの酒だのと忙しい。

ここでの日々は文字通り桃原郷のようで、時間のたつのも覚えない。

酒のいける禪師が自身で陶元亮（潜。鉄心を譬える）が肉を持って来ることを許可された。

このような迅雷師であればこそ、私のような風変わりな男を受け入れてくれるのだ。

右詩について、湖山は頭評で、「君 年五十を過ぎて猶ほ此の氣力有り。後に數月ならずして没す。惜しいかな」と言う。山門に酒はともかく、肉を持ちこむ磊落ぶりを、「氣力」の現れ、と観ているのである。実にその通り、この頃まで、鉄心の氣力・体力は衰えていなかった、と言って良いであろう。

## 九十三 鉄心の晩年

明治五年（鉄心五十六歳）の正月二十日、鉄心は例により、諸人をひきいて梅を牧野に探った。道すがら檜村に愛酒山人を訪うたが、山人は一行を歓待し、鉄心たちは暫し酒を酌み交わした。鉄心たちが山人宅を辞去しようとする、数人が抜けて帰ろうとする。これを鉄心は、からかって、「壬申正月二十日、諸子を拉し梅を牧野に探らんと欲す、途に檜村の愛酒山人を訪ふ、山人款待し、緩酌すること之を久しうす、将に辞去せんとするに、俗客数人脱し帰る者有り、戯れに賦す」〔遺稿〕八を詠じた。

佳節招佳客 佳節 佳客を招く

団欒富貴春 団欒す 富貴の春に

転興山村去 興を転じて 山村に去る

相隨有幾人 相隨ふもの 幾人か有る

山人は、ゆかりの有る日に風流な客たちを招かれた。

一同、春の酒肴がたっぷり用意された宴で談笑する。

趣向を変えて山村に赴くことにした。

付いて来る者は、どれほど居るやら。



俗客たちは、まだ寒いやら、酒肴はたっぷり入ったやらで、山村へ出るのが厭になってしまったのではなからうか。そうした無風流ぶりを鉄心は、からかっているのであろう。なお藤陰(四十六歳)も、この内にいたことは、「正月念日、是水君に従ひ諸子と共に、梅を牧野に観る、坡翁の『不知江柳已揺村』句を以て韵と為し、五絶七首を賦す」(『藤陰遺稿』二)があることよって知られるが、その第三首の起句に「路に村長の宅を叩く」とあるから、愛酒山人とは檜村の村長であったようだ。

二月十日、鉄心は、梅を養老山の麓の勢至村(現、養老郡養老町)に観ようと出かけ、途中、山口氏の悠然楼に飲んだ(二月十日、梅を養老山下の勢至村に観んと欲し、路次 山口氏の悠然楼に飲す)『遺稿』八)。

近観不及遠観好 近観は 及ばず 遠観の好きに

溪外三家又五家 溪外 三家 又た五家

一目風光春若海 一目の風光 春は海の若し

看為雲影是梅花 看て雲影と為すは 是れ梅花

梅花は、近くで観るよりは、遠くから観た方が良い。

谷川の向こうには家が三軒から五軒。

一目で海のように広がる春景色が見渡せる。

雲かと思えたのは梅花の連なりだった。

悠然楼から見渡せる遠景を詠じたものである。やはり同行者の中には藤陰がいて、「壬申二月十日、是水君に従って臥竜梅を勢至村に観る、路次 山口氏を訪ひ、席上 君の韵に和す」（『藤陰遺稿』二）を詠じているが、その注に、「山口氏は医を業とす」という。

この直後に鉄心は、勢至村に到るが、梅花はまさに盛りであった（「勢至村に到れば、梅花方に開く、感有りて作る」『遺稿』八）。

伏水観梅兵燹後	伏水に	梅を観しは	兵燹 <small>せん</small> の後
紅塵重酔墨挖川	紅塵	重ねて酔う	墨挖 <small>すみた</small> 川
山村今日多真趣	山村	今日	真趣多し
独有老牛花底眠	独り老牛	の花底に眠る	有り

伏見で梅花を観たのは兵火（伏見戦争）の後のことだった（明治二年か。九十六参照）。  
人出で賑わう隅田川では何度も梅花を観ながら酔ったものだった。

今日、山村で観る梅花には本当に風情があり、  
ただ老いた牛が花の下で眠っているだけだ。

右の詩は、『遺稿』巻八に収まる詩の中で最後から二首目に置かれている。ということ、鉄心の死に最も近い時期の作品の一つ、ということである。その為であろうか、兵火と梅花の対照というドラマ性や都会の観梅という遊戯性を

捨象して、山村の平凡な風景の裡に真の雅趣を見出している。つまり、趣を華やかさに求めず、平凡さに取るのである。校訂者の湖山が巻末に、「此の巻の三十余首は、蓋し朝天余稿の後の作に係り、鋒銛稍く消え、大いに老成の氣象有り」という通り、けれども消えて、老成の氣象が醸し出されているのである。

『遺稿』巻八の掉尾に置かれる詩とは、鉄心の現存詩の内で最後の作品、ということになるが、「戸倉氏に宿す、賦して主人に贈る」と題するものである。

名楼高聳对名泉 名楼 高く聳え 名泉に対す

此老乃知筆有神 此の老 乃ち知る 筆に神有るを

寄語風流觀瀑客 寄語す 風流 觀瀑の客に

山前有箇善詩人 山前に 箇の善詩人有りと

立派な楼が高く聳えて、趣ある泉に向かい合う。

ここの主人こそは筆に靈力が備わっている方だと知られる。

滝を見に来る風流な人々に言っておきましょう。

山の前には一人の詩の名人がおると。

戸倉氏とは、養老の滝のあたりに住む人のように思われる。この詩は、鉄心の臨終の抱懐を述べたものではないが、『遺稿』における最期の作品なので、挙げておく。『鉄心遺稿』の校訂者である小野湖山が、明治五年十月に校訂をほぼ

終えた際に言うように、この頃の作品は残されているものが乏しく、遺脱しているものが多い、と考えられる。従って、死の直前の鉄心の消息は、あまり詳細にはできないのである。なお、藤陰も校訂者であったことは、彼に「雨窓、鉄心遺稿を校して感有り」（『藤陰遺稿』二）があることによって知られる。

## 九十四 鉄心の死

鉄心は、その年、即ち明治五年四月十五日に溘焉として没する。享年五十六。その早い死は、大酒が齎したのではなからうか。桃源山の代々の墓に葬られた。妻の戸田氏とは離婚し、その後、再びは娶らず、側室を置いて、三人の娘を設けた。甥の忠迪を嗣となし、長女をめあわしたのである。鉄心は典型的な、斗酒なお辞せず、英雄色を好む、というタイプであり、淋病を痼疾として抱えていたから、夫人とすれば耐えられないものがあつたかも知れない。容貌瑰偉であり、面は丹色であつた（野村藤陰「鉄心小原君墓碑銘」『藤陰遺稿』三）。膂力が強かつたことは、第三十八に述べた通りである。

時に木戸孝允は、米国ワシントンに滞在しており、鉄心の訃報を聞くのが遅く、これを知つたのは、同年の六月十八日のことであるが、『日記』のその日の上欄に、

小野鉄心てつしん没死の説あり。余 鉄心とは戊辰己來の知己にして、其の交わり旧知の如し。

此の伝説を聞き、覚はず惨然たり。

と書き付けて、愛惜の意を示している。

三年後の明治八年五月六日、海鷗（四十歳）や雪爪たち同志十数人が小原忠迪と謀って、鉄心の祀典を東京両国の井

生村楼で挙行した。同志たち誰もが客が多くて席が狭いであろうと心配し、ほかに川長楼・亀清楼かめせい・青柳楼をも借りた。これら四楼は、隅田川の兩岸を隔てて相對しているので、一大宴席となった訳である。そこで、川には二十艘あまりの連絡舟を用意し、送迎のルートとした。別に二隻の大船を中流に浮かべて、煎茶の席を開き、楽曲を演奏させる。それぞれの楼にはお酌の芸妓たちを置き、筆硯をも置く。用意は周到である。この日、会する者は、岩倉具視・正親町実愛・三条実美・松平春岳・伊達宗城むねなり(前宇和島藩主・民部卿兼大藏卿)・木戸孝允・伊藤博文、および旧藩主戸田氏正・氏共父子、そのほか公卿侯伯から諸官員・儒者・僧侶・詩人・画家など五百人余りが集まった。すべて鉄心と交友があった人々である。こうした盛会が都下に未曾有の盛事として伝えられない筈がない。鉄心が普段豪遊を好んでいたので、友人たちがこうした盛会を企て、その靈魂を慰めたのである。

以上は、海鷗の「故参与小原鉄心翁祀典に恭しく賦す、並びに序」(『遺稿』)の序に拠って記したのである。ちなみに木戸孝允の『日記』には、

今日、小原鉄心追善にて、同人知友、其の外來集するもの、殆ど二百人。小原・菱田海鷗・鴻雪爪等、尤も周旋せり。

とある。集合人数が海鷗の言う所とは異なる。

海鷗は、この折に二首の絶句を詠じているが、ここには、その次に配されている五律「小原鉄心翁を追懐す」を挙げよう。

一藩存顧託 一藩 顧託を存す

幾歳入京塵 幾歳か 京塵に入る

白髪功名重 白髪 功名重し

黄金歌舞頻 黄金歌舞頻りなり

片言能破惑 片言 能く惑いを破り

大義不思親 大義 親を思はず

褒詔吟鞍賜 褒詔 吟鞍賜ふ

長為麟閣人 長しなえに麟閣の人と為らん

大垣藩に主君から後事を託された家臣として存在し、

何年、京洛の巷に入ったことか。

白髪とともに功績と名誉は重くなり、

黄金を散じて頻繁に歌舞を楽しむ。

寸言によって人々の惑いを論破し、

大義を貫くためには親族をも最肩しない。

詔で褒められて銀の鞍を賜り、

永遠に麒麟閣に肖像画が伝えられることとなった。

さすがに鉄心に親炙した者の詩であるだけに、その生涯と事蹟とを巧みに要約している、と言えよう。第五句は、大垣藩を短時間のうちに佐幕から勤皇に反転させたことを述べ、第六句には、「戊辰の伏見の役に、翁の子の忠迪、藩兵

を率いて賊軍に在り。翁深く之を患ふ。然れども計の救ふべきもの無し。乃ち憤然として余が輩に謂ひて曰く、『兎が頭斬るべし、大義背くべからず』と。遂に議して藩主をして逆を去り正に反らしむ」という自註があり、伏見の戦いの際に、長州藩と対峙していた忠迪を一旦は諦めかけた事があつた事を伝える。しかし、その忠迪に慎重に振舞うよう海鷗らを伝令に遣わしたことは、第一に詳述し、第八十四にも補足してある通りである。また、第七句にも、「事平らぐ後、朝廷大いに翁が勤王の功を賞し、特に銀鞍を賜ふ」という自註があるが、それに就いては第九十三に詳しく述べた。但し、銀鞍ではなくて、銀鍔であつた。第八句の麒麟閣は、後漢の武帝が麒麟を捕えた時に建て、後に宣帝が十一人の功臣の画像を掲げさせた高殿（『漢書』蘇武伝）を指すことは、言うまでも無い。言い忘れたが、第四句に鉄心の遊び好きを伝えているのも、必要なことである。

この詩に就いて雪爪は、「鉄心は天下の人豪と、日々鴨庄に飲み、国事を紅圀粉陣の間に論ず。前聯は当時の状況を写し尽し、何等の妙手ぞ。後聯に至っては則ち海鷗も亦た与に謀りて力を致せし所なり。大垣藩の戦功、薩長土の三藩に亘く、其の実は大義親を滅することより胚胎し来る。鉄心の如き者は豈軽重を知らざる大丈夫ならんや」と評している。決して過褒ではあるまい。

## 九十五 海鷗の後半生

海鷗は、明治六年（三十八歳）八月、本官を免じられ、十四年（四十六歳）五月、判事に任じられ、六月には長崎に遊び、元田南豊もとだなどと聖福寺を訪れている（明治十四年六月二十五日、元南豊・本紫溟・田万谷及び諸子と共に聖福寺に遊ぶ、南豊に詩有り、即ち其の韻に次し、住僧に示す）。十月には、広島控訴裁判所に赴任した。

十六年（四十八歳）十一月、文部省権少書記官に任じられたが、同僚に依田百川（学海）がいた。十八年（五十歳）三月、職を罷め、以後は仕えず、東京に永住して書を授けた。友人には鴻雪爪・秋月古香・大嶋怡斎・巖谷一六・岡鹿門などがある。二十一年（五十三歳）春には、小野湖山と五十首の詩を唱和している（湖翁と唱和せる五十首 序を併す）。

二十五年（五十七歳）の九月、巢鴨村に移住した。幾ばくも無く病に罹り、貧困甚だしく、郷友の仕送りで、わずかに飢えを免れていた。しかし、一日も作詩を廃せず、この間の詩稿を『巢鴨余鳴』という。

二十六年（五十八歳）一月には、二人の娘鶴子・静子は、既に結婚していて、三人の孫を連れて来訪している（一月二十日、女鶴子・静子等 孫三人を携えて至る。喜びて賦す、四首）。

六月、大垣に帰って展墓し、六十日余り悠遊し、詩百首余りを得た。題して『濃遊詩草』という。この折に『海鷗遺稿』の編者である大野百鍊（鉄之助）に会ったのである。百鍊の「海鷗遺稿」序に、

一たび故園に遊ぶや、百鍊初めて先生に客館に謁す。練紙 堆を作す。皆 人の属する所なり。興到れば毫を呼び、雲の起き龍の躍るごと、観る者をして快からしむ。今や音容を隔つること三十有余年なりき矣。と、その詩書を乞う者の多いこと、海鷗の敏捷ふりが語られている。

勿論、鉄心の墓参りをも行っているのです、その様は「鉄心翁の墓に謁す。涙余此れを賦す」に詠じられている。

藍川明月老山雲 藍川の明月 老山の雲

詩酒優游客作群 詩酒に優游して 客 群を作す

借問九原頻噓否 借問す 九原 頻りに噓するや否や



話頭無日不関君 話頭 日として君に関らざるは無し

長良川を照らす明月や養老山にかかる雲を見て、  
群れをなす客を相手に詩や酒にゆったりと遊ぶ。

ちょっとお尋ねしたい、鉄心さん、あの世で頻りにくしゃみをしているではありませんか。

客との話題は、あなたに関らないものではありませんから。

鉄心死して二十年、いまだに彼の事を偲ぶ人が多かったのである。

海鷗が大垣に在る際、娘婿松野勇雄が急死したので、八月、東京に急いで帰る（大垣より急いで帰り、女婿松野勇雄の柩に対す。愴然として此れを賦す）。松野家に嫁いでいた娘は、二十七年（五十九歳）には、孫たちを携えて実家に戻り、海鷗夫妻と同居した（「閑居二首」第二首第二句『異姓亦た同居す』の自注に「亡婿松野氏の遺族同居す」と）。男子の冬吉は、まだ少年であるようで、雪の日に雪兔を造ったりしている（「兄冬吉、雪兔を製し、殆ど真に類す。因りて此れを賦し、以て与ふ」）。

二十八年（六十歳）、春、宿痾が再発し、三月九日に歿した。男子冬吉は、後に僧となり、実敵徳応と号し、昭和三年当時は、信州埴科郡寺尾村（現、長野市松代町柴三八）の大鋒寺住職であった。その後裔の菱田文雄氏は先年に亡くなられ、現在は文一氏が同じく松代町東寺尾に居住しておられる。以上は、『海鷗遺稿』の巻頭に掲げられる「菱田海鷗略伝」（たぶん『遺稿』の編者である大野百鍊、鉄之助の撰であろう）に基づき、筆者が『遺稿』所収の詩などを検討して記したのである。大鋒寺と菱田氏の後裔に関する情報は、大鋒寺の現御住職である富沢氏と菱田文一氏から御教

示を受けた。

## 九十六 野村藤陰の略伝

藤陰の伝は、小野湖山の「藤陰野村君墓碣銘」〔藤陰遺稿〕三。明治三十二年十一月撰す。湖山は八十六歳と、その息小野正弘の「藤陰野村先生七袞<sup>ちん</sup>寿序」〔冊子。明治二十九年三月草。門人と称す。七十寿筵の配り本か〕が備わる。それらに拠れば、名は煥、字は士章。藤陰の父は龍左衛門といい、大垣藩の歩卒（足軽。二十二人扶持）で、母は加納氏であり、文政十年（一八二七）正月に生まれた。幼くして好学、十八歳にして藩学の助教に補せられた。鉄心には鑑識眼があり、藤陰を一藩の教養の任を託せる者と早くから見込んで、これを斎藤拙堂に入門させ、経学・文章を学ばせた。だが、その道德実践の厚いことは、拙堂も加えるものは無かった。擢んでられて儒員となり、侍講に進み、実学を先んじ、虚文を斥け、廉恥を重んじ、礼節を崇め、藩士に対する影響力は強かった。

慶応元年（一八六五、三十九歳）、督学参謀に進み、禄五十石を賜る。評定局が置かれると、その副総裁となり、班は年寄に次ぎ、郡奉行加役を兼ねた。明治元年（四十二歳）十一月に藩校敬教館の督学を拝し、三等官に班せられ、禄は五百石となる。大垣藩権少参事に進み、学務を管す。歩卒（足軽）の資格から藩老と伍するまでに昇格するのは異例であるという。

藩が廃せられると、五年（四十五歳）八月、大蔵省に出仕したが、翌年、親の病を以て辞す。帰郷して岐阜県師範校および華陽学校の教職を歴任し、二十九年（七十歳）に至っても、岐阜中学大垣分校の教師を嘱せられた。漢詩文の実作では現在の大学院の中国文学の教授よりも格段上の技倆を備えている藤陰が、旧制とはいえ、中学の教師を担当して

いたなどというのは、洵に勿体ない話である。明治期には各藩で、藩儒が中学の教師になる、という例が多かった。

二十九年（一八九六、七十歳）十一月、長男の龍太郎が東京に引き取る。三十二年三月、夫人とともに墓参のために帰郷し、故旧が争い迎えたが、十五日、病を得て没した。七十三歳であった。大垣の全昌寺で葬儀し、千五百人が会集した。東京本郷の長泉寺に埋骨される。

人となりは、端正で、鉄心が歌舞の座において談論風発、歌管大いに起こっても、藤陰だけは静黙を守り、容いよいよ恭しく、気はいよいよ和、近づく者をおのずから慎ませたという。大垣詩壇において、最も君子人であったろう。

妻の増田氏は、藩士耕蔵の娘で、三男一女があり、嗣子龍太郎は大学に入り、理学を修め、逋信省の鉄道技師となり、高等官であり、従六位に叙せられた。次男虎次郎は、大学で政法科を治め、大蔵省の主計官であったが、先だつて没した。次の喜三郎は夭折した。娘の広は、同藩士戸田鋭之助に嫁いだ。龍太郎は、小原忠迪の娘を娶ったが、これは鉄心の嫡長孫である。もつて家庭教育の宜しきを得たことが推察されるのである。

## 九十七 夢のまた夢

海鷗が明治二十六年六月から八月にかけて大垣に帰奠したことは、九十五に述べたが、その期間に「夢遊岡山記」〔海鷗遺稿〕という漢文を作った。岡山は、鉄心の詩にもよく出て来るが、美濃国不破郡に在る墓所である。この文には大垣詩壇の殆どの人々が登場し、様々の姿態を見せる。それは夢の中の光景という設定であるから、虚構が加えられてはいるが、かなりの程度で在りし日の詩会の様子が反映されているものと考えられる。そこで、それを窺うべく、その要をしるしてみよう。

鴻雪爪夫子が白雲に駕し長風を御し、岡山の頂きに遊ぶと、私海鷗が後を追って至る。夫子は拍手して、「妙」と称す。そこで、一緒に是水翁（鉄心）に見える。翁は急いで僕をして毛氈を敷かしめ、我々兩人を留めて飲ませる。翁は東に向かつて坐り、細香は南に向かつて坐る。鳥居研山・高岡西溝・小野崎立堂・天遊・霞峯以下は西に向かつて坐っている。翁は斗入りの杯を取って自ら酌むこと三たび、喜びが眉宇に表われている。起ちあがって鴻雪翁を上座に導き、挨拶して言う、

「十八年間お会いしませんでした。今日はどういふ幸いかお出を頂きました。粗末な宴席で、楽しみようがありません。どうか一座の人々と芝居をなさって、お楽しみ下さい」

夫子は、

「承知いたしました」

という。

そこで、老農の助太をして村人を募集させ、楽器や化粧道具を運ばせる。情報が村内に伝わり、がやがやと見物に來る。村長の常右が鶯鳥や松茸を持って來たり、油売りの平助は魁春の大樽を二箇、馬に運ばせ、門に到ると配給しようとする。役人の鶴二・亀二が制止して入れまいとすると、平助が兩人の耳にひそひそ話して、入れた。江馬金粟・溪毛芥・大夢も、招きに応じてやって來た。そこで、是水翁は細香と計り、役割を分かたず。是水は大星由良之助、細香は勘平の母に扮し、研山は若狭、毛芥は高師直、西溝は加古川本蔵、助太は平右に出で立つ。金粟は、その頭に鬘を結び、腰に裳を着けて、お軽に扮し、立堂は美しく化粧して勘平に扮する。そして天遊は定九郎に扮し、与一兵衛は平助である。霞峯は簾の内で義太夫を語り、常右は三味線を弾く。大夢が拍子木を打ち、開場する。鴻雪翁は喜んで、望遠鏡を当て、覗いている。私は腹を抱えて覗き見ている。暫くすると、猪が飛び出て、秋の花

や草の間を跳ね廻る。鉄砲の音が響くと、定九郎が倒れ、人々もまた一斉に散り、にわかにかかった丘になった。鴻夫が私に告げて言う、

「夢だ」

ああ、私が維新の始めを回顧するに、是水翁は一藩の柱石で、大義や勤王の件を明らかにした。その忠憤義烈の気は、凛として人の耳目に残っている。その功績は、ただに由良之助に倍するばかりでは無い。西溝・立堂の諸子もまた、それぞれの役割を勤め、誤りを補い効を奏したことは、本蔵や勘平の比ではない。それなのに今や皆、墓の木は抱きかかえるほどに成長して、ただ鴻夫と私ばかりが生きているだけである。ああ、みな夢だ。私は、これを夢のまた夢と言おう。とは言うものの、夢は夢でなく、夢でないのは夢だ、ということも心得ている。とすれば、今日の遊びが果たして夢か、夢でないのか、どうして分かるか。二人は相顧みて、暫し嘆いておった。時に明治某年月日である。

これを読むと、一に、鉄心や海鷗を取り巻く大垣詩壇の人物の殆どの名が知られるのである。ただ、どういふものか、野村藤陰（まだ生存している）と宇野南村の名だけが出て来ない。生真面目な藤陰と南村は、戯画化するには躊躇われるからであろうか。二に、のみならず、彼らの周囲にいた村長や役人、油売りの名前までもが知られるのである。彼らの名は虚構である可能性もあるが、たぶんそうではないだろう。三に、『仮名手本忠臣蔵』の上演という虚構を通して、これらの人々が鉄心を中心として星が取り巻くようにそれぞれの役割を果たして、大垣藩における勤王の事業を實現したことを提示する。この点は、筆者がこれまで長々と、大垣藩における回天の事業を特に詩壇に即して展望して来たことに通じる。四に、しかし、人間の存在が最終的にはすべて虚しいものである以上、夢のまた夢、彼らの人生に一抹の

虚無感も感ぜられることを述べている。人生の晩年に達した海鷗は、『莊子』齊物論の胡蝶の夢の論に基づいて、夢のような、しかし確かに実在していた人物たちとその営みとを、文字通り夢現つに回顧する。それがこの一文なのである。五に、虚構を通してではあるが、大垣の詩壇の大らかで融和的な明るい雰囲気を感じ取られるのである。これまで私たちがたびたび大垣の詩人たちとその交友の詩会に就いて述べてきたが、彼らの詩会は、鉄心の存するところ、概してこのように大らかで融和的で明るい雰囲気のものであったろう、と思われるのである。

（とくだ・たけし 法学部教授）